

# 戦前日本のリカードウ研究

1869 - 1929 年試論

出雲雅志

## 1. 西洋経済思想の受容とリカードウ研究

西洋の経済思想が日本に紹介された記録は、少なくとも、アダム・スミスの『国富論』が刊行された年と同じ 1776 年までさかのぼることができる。オランダ東インド会社の医師として長崎出島に赴任したスウェーデンの植物学者カール・ペーテル・ツェンベリーが、この年の 5 月、江戸滞在中に医学、物理学、植物学とともに経済学を蘭学者に教えている<sup>1)</sup>。おそらく、これが日本と西洋経済思想との最初の接触であった<sup>2)</sup>。

しかし日本に経済思想がなかったわけではない。たとえば、江戸時代にあらわれた熊沢蕃山や太宰春台、三浦梅園、本多利明、海保青陵、佐藤信淵、二宮尊徳などは、商人階層の勃興や利潤追求の是非、労働倫理や道徳の形成、外国貿易の利点と欠点、市場や貨幣の機能、政府の役割といった、貨幣経済の浸透にともなう西洋と同じように日本が直面していた経済問題を分析し、すぐれた著作を残している<sup>3)</sup>。明治維新を境にいきなり流れこむ西洋の経済思想が日本で広く受容された背景には、こうした多様な経済思想がはぐくまれてきた知的土壌があることを見過ごしてはならないであろう<sup>4)</sup>。

ペリー来航と明治維新を契機とする西洋経済思想の日本への移入は、経済書の流入とその翻訳、欧米への留学、外国人教師による講義、日本人教師の教科書出版、経済雑誌の発刊と普及、高等教育機関の設置と経済学の制度化など、さまざまな径路をもち錯綜した過程をたどった<sup>5)</sup>。それだけではない。重商主義や重農主義、古典派経済学をはじめ、マルクス主義や限界効用学派、新古典派経済学、歴史学派までもが、その歴史と空間を飛びこえ、わずかな期間にほ

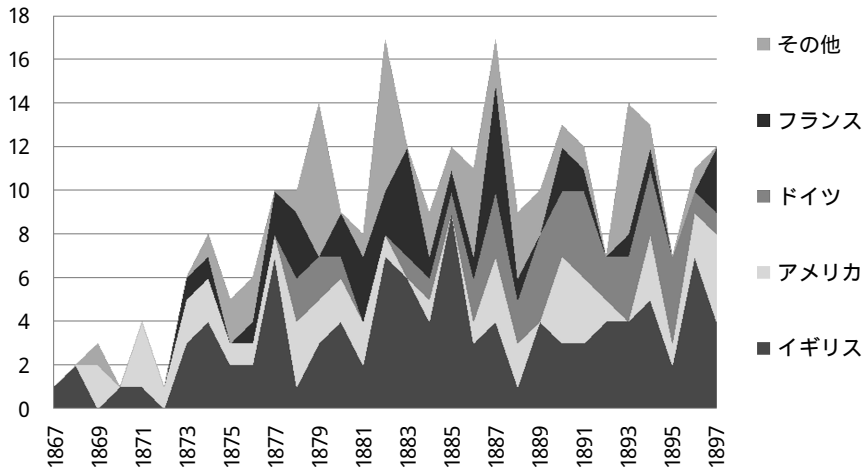
とんど同時に日本へなだれ込んだ。そのため、近代日本の構築と変容をめぐる論争は対立と協調が交錯する複雑な様相をみせる。もちろん、デイヴィド・リカードウの受容と研究の歴史も、その例外ではない。

本庄(1946)の調査とそれを「補訂」した杉原(1980)によれば、1867年から1897年までに翻訳出版された西洋の経済書は、あわせて276冊にのぼる<sup>6)</sup>。国別の内訳は、不詳の31冊をのぞいて、イギリス104冊、アメリカ52冊、ドイツ40冊、フランス37冊、オーストリア7冊、オランダ3冊、ベルギー3冊、イタリア2冊である<sup>7)</sup>。年次別の推移をみると、イギリス、アメリカについてフランス、少し遅れてドイツがつづき、西南戦争が勃発する1877年から出版総数が増え、自由民権運動が終焉を迎える1887年ころからドイツ書の翻訳数が増加する<sup>8)</sup>(図1参照)。

よく知られているように、西洋経済書の翻訳出版は、マルクスの『資本論』公刊の年と同じ1867年、神田孝平の『経済小学』にはじまる。ジョン・ステュアート・ミルの友人ウィリアム・エリスの著書 *Outlines of Social Economy* のオランダ語訳からのこれが最初で最後の重訳であった<sup>9)</sup>。しかし注目しなければならないのは、これがオランダ語からの重訳だったことではない。1850年代と60年代にオランダ語のほかフランス語、ドイツ語、ロシア語、イタリア語、ポーランド語、少し遅れてポルトガル語に訳され、ヨーロッパに流布していたという同時代性である。その6年後、1873年に林正明が訳した『経済入門』の原著は、前の年にでたばかりのミリセント・フォーセット *Political Economy for Beginners* の第2版であったし、つづいて永田健助が1877年に訳した『宝氏経済学』も、その前年に刊行された第4版を底本とする<sup>10)</sup>。イタリア語、スペイン語、ドイツ語、フランス語、ロシア語(1935年にタイ語)に訳され、ヨーロッパに広く読者を獲得したばかりか、明治の日本でもっともよく読まれた入門書であった<sup>11)</sup>(杉原1972: 5-8)。

しかし、この翻訳の同時代性は、たんに歴史的な時間だけを意味しない。むしろ、西洋の資本主義体制にいやおうなく組みこまれつつあった非西洋と西洋周辺の、直面しなければならなかった深刻な危機意識の共有とでもいうべきものだったのであろう<sup>12)</sup>。西洋資本主義との接触による急激な社会変動と文化変容は、それぞれの社会に固有の困難と共通の問題を引きおこした。西洋経済思想は、西洋に全世界を強制的に同期化させる強大な力の一部となってあらわれ、

図1 各国別翻訳経済書数の推移（1867 - 1897年）



出所：本庄（1946: 258-280）および杉原（1980: 99-108）より作成

模倣や順応あるいは反発や反動をともなうその受容過程は、非西洋と西洋周辺社会それぞれに特有の痕跡をとどめた。日本のリカードウ受容も、その典型的な事例のひとつとみることができる<sup>13)</sup>。

リカードウの日本への導入をくまなく調査し分析した真実（1962, 1965）は、その「特異性」として、第1に「時論との関係から遮断された理論としての導入」、第2に「マルクスのすぐれた想源としての間接的導入」、第3に「導入の遅延性」を指摘した<sup>14)</sup>（真実1962: 68-74, 1971: 173-176）。たしかに翻訳の時期をみるかぎり、1875年から翻訳がはじまるJ.S. ミル、1882年からのスミス、1910年からのマルサスと比べて、1921年になってようやく抄訳がでたりリカードウは、驚くほど遅かった<sup>15)</sup>。J.-B. セーヤリスト、マルクス、マーシャル、ジェボンズ、ワルラスよりもさらに遅い<sup>16)</sup>。

しかし、なぜJ.S. ミル、ついでスミスがまず訳され、マルサスをあいだにはさんで、リカードウははるかに遅れたのであろうか。そしてリカードウの経済学はどのように受けとめられたのであろうか。

本稿はこれらの問題への間接的なアプローチにすぎない。このささやかな試みは、戦前日本のリカードウ研究 それもごく限られた範囲で の特質を対比し、その継承関係をみなおそうとするものである。だが、さまざまな制約から部分的な素描になることはさけられない。個々の人物とその学説は、その詳細を多くのすぐれた研究にゆずる<sup>17)</sup>。

## 2. 日露戦争までのリカードウ受容

リカードウの主著『経済学および課税の原理』は、1921年、東北帝国大学の堀経夫と和田佐一郎とによってそれぞれ抄訳された<sup>18)</sup>。河上肇は、堀との「共訳」である『経済原論』の序で次のようにいう<sup>19)</sup>。

我国には既にアダム・スミスの『諸国民の富』の抄訳があり、又マルサスの『人口の原理』の抄訳もある。しかるに、資本主義経済学の三大建設者の一人たるリカードの『経済原論』の翻訳が、今日まで、何人によっても企てられなかったと云うことは、寧ろ不思議とすべきほどの事である(堀1921: 2)。

もちろん、翻訳がなかったからといって、リカードウの名前が知られていなかったわけではない。おそらくその名前を日本で最初に記したのは、明治維新直後、1869年に刊行された『官版経済原論』であろう。アメリカの自由主義経済学者アーサー・ペリーの *Elements of Political Economy* の抄訳で、訳者は、適塾で蘭学者の緒方洪庵に学んだ緒方正(のちの若山儀一)であった<sup>20)</sup>。その巻五「価値」にあらわれる「リカルト」が Ricardo の最初の日本語表記である(緒方1869: 15)。

日本で初めて講義にリカードウをとりあげたのは西周であった。その講義録『百学連環』によれば、1870年ころから、私塾育英舎で「此人の著述に *The Principle of Political Economy and Taxation*, 制産税入本論なる書あり。此人より始めて租税の事を兼て学問するを發明し、且つ rent 及び value 即ち物の直の事を論せり」と説いたという<sup>21)</sup>(西1981: 238, 堀1991: 405-432)。西は、津田真道とともに、江戸幕府の派遣留学生として1863年から1865年にかけてオランダに滞在し、ライデン大学のシモン・フィッセリングのもとで経済学のほか自然法、国際法、国法学、統計学を学んだ<sup>22)</sup>。西洋の経済思想を日本人で初めて体系的に修得した西と津田は、福澤諭吉とならんで、西洋経済思想の普及に先駆的な役割を担った<sup>23)</sup>。

ところで西周と緒方正が、ともに「オランダ・コネクション」の一員であっ

たことは驚くにあたらない。とくに 18 世紀から 19 世紀半ばまでの蘭学は、体系的思想のほとんどすべてを輸入しなければならなかった日本にとって、巨大な知の体系の淵源であり先導者であった。オランダから移入された技術や軍事、医学、薬学、植物学、天文学、経済学、統計学、法学といった一連の科学的体系は、日本の知識人の歴史観や世界像を一変させ、日本を西洋と比較しその「自画像」を描くことを可能にした。西周の『百学連環』は、その名が示すように、学術全体をひとまとめにとらえ、世界をあらゆるものの連関においてつかみだそうとする壮大な試みだったといつてよい。

リカードウの貨幣・金融論は、アーサー・クランプの *A Practical Treatise on Banking, Currency, and the Exchanges* を大蔵省の宇佐川秀次郎が 1876 年に訳した『銀行実験論』をとおして、比較的是やくから知られていた。しかし、その貨幣・金融論を原典にもとづいて本格的にとりあげたのは、1901 年に *Essays on Currency and Finance by David Ricardo* を編集し出版した東京帝国大学のチャールズ・グリフィンだったと思われる。けれどもその講義の詳細はよくわかっていない<sup>24)</sup>。

若山儀一がその「広告」(序文)に「我邦今日の実況に適切なる保護政策を論じたる書の翻訳公行せる者あるを聞ず」(若山 1877: 13-14)と書き、J. B. パイルズの *Sophisms of Free-Trade and Popular Political Economy Examined* を自ら訳して『自由交易穴探』を出版したのは 1877 年のことである。若山は、すでに 1871 年、日本でいち早く「保護税説」を著した保護主義の先駆者であり、『東海経済新報』を創刊して田口卯吉と論争をくり広げた犬養毅の「影武者」であった<sup>25)</sup>(長 1983: 4)。ここで見逃してならないのは、パイルズが保護主義の立場からリカードウの比較生産費説を批判したのに対して、意外にも、『東京経済雑誌』を創刊し自由貿易を唱えた田口が比較生産費説を批判したことである。1878 年に刊行した『自由交易日本経済論』第 5 章「リカルド氏の説を駁す」で田口は、若山の訳もある *Elements of Political Economy* でペリーが解説した比較生産費説に反駁を加えた<sup>26)</sup>。リカードウが直接の対象でなかったとはいえ、国際分業の利益を理論的に根拠づけるはずのリカードウの比較生産費説は、スミスとマンチェスター派に依拠する田口の自由貿易論には必要とされなかったのである。そもそも、欧米が「大不況」に突入していたこの時期の、自由と保護をめぐる日本の華やかな論争のどこにも、まったくといってよいほ

ど、リカードウの影響はみられない<sup>27)</sup>。

鈴木券太郎が1882年に『東京経済雑誌』に掲載した「経済学四大家評伝」は、おそらく日本で初めての、ごく短いリカードウの伝記である。リカードウとともに、マルサスとジェイムズ・ミル、フレデリック・バステアが「四大家」に選ばれているのは、鈴木が依拠した「種本」によるのであろう。その「ダビッド、リカード小伝」は次のようにリカードウを描きだす。

財政と統計上の著書に天下を驚嘆せし学者は先生を措いて誰ぞ。……清廉能く物に堪ゆ。加うるに天稟の才智あり。……家恒に巨万の財宝を蓄う。1810年通貨の下落の趣旨に基づき「モーニング、コロニクル」(新聞の名)の文壇に立てり。……経済学及収税之理といえる書を著せり。此書国家の富及度支の根原と浮沈とを論弁せるものなり。其光輝凜として今猶お朽ちず(鈴木1882: 214-215)。

このころ大学をはじめとする高等教育機関では、日本語による経済学教科書が普及しはじめる。天野為之が1886年に刊行した『経済原論』は、初めて日本語で書かれた経済学の教科書で、22版を重ねて3万部を売り上げ、当時のベストセラーとなった。その翌年、1887年に刊行された阪谷芳郎の『経済学史講義』は、日本初の経済学史の教科書である。1894年には、J. K. イングラムの *A History of Political Economy* を底本とする『経済学史』が浜田健次郎と伊勢本一郎によって著され、阿部虎之助がその原著を1896年に翻訳した『哲理経済学史』は、全訳された西洋経済学史の最初の教科書となった。大学などの高等教育機関では、こうした日本語の教科書をとおして間接的にリカードウが学生に伝えられていった<sup>28)</sup>。

大原九水(大原祥一)が「リカード氏の賃銀及利潤論を評す」を『東京経済雑誌』に掲載したのは1901年であった。おそらくこれがリカードウ賃金論にかんする最初の論文だったと思われるが、ドイツの社会主義者フェルディナント・ラッサールの賃金鉄則論にならってリカードウ賃金論を解釈し、その誤謬を批判した。マーシャルに依拠してリカードウ賃金論の社会主義的な解釈を否定したのは、藤本幸太郎が1908年に『日本法政新誌』に発表した「所謂リカードノ賃銀鉄則二就テ」であった。同じ年、河津暹が『法学協会雑誌』に「賃

銀に関する学説について」を、また杉程次郎が『日本法政新誌』に「労銀基金説、其論拠及沿革を論ず」を掲載し、リカードウ賃金論をめぐる論争に参加する。その翌年、松村光三が「賃銀学説」を『国民経済雑誌』に発表し、賃金は最低生活水準に下落する傾向にあるとするリカードウの社会主義的解釈に反対した。

ドイツ社会政策学会にならって1897年に日本で発足した社会政策学会が、その第1回学会を開催したのは1907年であった。その翌年、1908年に吉田巳之助がアーノルド・トインビーの *Lectures on the industrial revolution of the 18th century in England* を訳して『英国産業革新論』を出版する<sup>29)</sup>。ジョン・ラスキンの影響をうけたといわれるトインビーは、リカードウ賃金論の社会主義的解釈を批判する一方、リカードウ地代論をもとに土地共有論を主張するヘンリー・ジョージを「純然たるリカードの弟子」(吉田1908: 203)と呼んだ。

リカードウ賃金論をめぐる論説の多くは、たとえときに実態から遊離する傾向があったとしても、低賃金、貧困、劣悪な生活水準といった現実問題を反映したものだったといつてよい。日清・日露の2つの戦争とともに、急速な工業化と大都市への人口集中が引き起こす「社会問題」に直面した明治政府は、1910年、大逆事件を契機に社会主義運動を弾圧し、韓国を「併合」して膨張主義をおしすすめた。リカードウが受容されていくのは、この日本社会の歴史的転換 石川啄木のいう「時代閑塞」 のさなかであった。

### 3. 福田徳三と河上肇

国家主義者として知られる北輝次郎(北一輝)は、日露戦争直後の1906年、23歳で『国体論及び純正社会主義』を自費出版した。しかしこの1,000ページにおよぶ大著は、明治政府によってただちに発禁処分をうける。このなかで北は、リカードウの地代論を自らの国家社会主義の主張に役立てた。

何人も知れる如くりカードの地代則によりて、地代が人口増加の結果と社会文明の賜なることは確定せられたる事実なり。……吾人は固より旧派経済学の無数の誤謬を認めることに於て社会主義者の名が示す如くなり且雖も、彼の如き方法によりて地代を思考し得べしとする者なり。 穀物の

市価は最も多き生産費によりて定まる。斯る生産費の差額は土地の肥度と市場への便宜とによりて生ず。斯く多くの生産費を要する下等地を耕作せしむるに至るは人口増加のために穀物の需要多くなるが故なり。……其の生産費差額は常に全く地代となる。而して人口愈々増加すれば、更に多くの生産費を要する下等地に耕境を低下せしめ、其の低下するだけ生産費の差額を多くせしめ、其れだけ地代を増加せしむ。故に現今小作人が地主に払う多額の地代は全く現今の如く増加せる人口の結果なり。増加せる人口と生食せる地主と何の関係あらんや(北 1906: 61-63)。

このあと北は「実に人口増加の結果たる地代が所有権神聖なる名の下に常に全く地主に掠奪せられつつある……此の地球は地主の奇蹟によりて6日間に創造せられたる者にあらざるなり」(北 1906: 63-65)とつづけ、土地所有とそれを根拠に地代を取得する地主を鋭く批判した。リカードウの差額地代論をよりどころとした土地所有と地主に対する辛辣で巧みな批難は、たしかに「リカードウ地代論を逆用して地代弁護論および土地占有論の打破にあてんとする点において、きわめてユニークな持味を有し……マルクスと並ぶものとしてのリカードウの社会主義的利用という点においては、新境地を開拓したもの」(真実 1962: 132)といえるだろう<sup>30)</sup>。

しかし、リカードウの地代論を北のように理解したのは、マルクスひとりではない<sup>31)</sup>。北の大著がでた2年後　まるでこれに共鳴するかのよう  
1908年に中央大学で開かれた「リカードの地代論よりマルクスへ」と題する福田徳三の講演に、同時代の秀抜な洞察の一例をみることができる。

リカードと云う経済学中興の祖と云ってもよい位な頭脳の極て鋭い学者が地代論を唱へた。之を名けてリカードの地代論と云う……。彼れの地代論は要するに地主を敵視したる説であって、地代は生産費の一部分に非ずと云うのが其終極の結論である。……土地は分量の限られたるもので人間は次第に増加するから土地を益々多く要する様になる、そこで土地の価が上るのであって地代は決して或る人間の働きに対する報酬ではない。穀物の輸入を禁ずれば国内で之れを多く生産することを要する、土地を多く要する、従て地主は富む、地主が悦べば悦ぶ程社会の進歩は止まる。……地主



が富めば富む程他の階級の者には富がはいらない，故に地主は社会進歩の敵であると云うことになる。リカルドの説を引伸せば地代論の点に於ては社会主義の結論に到達するに相違ない。然るにリカルドはここまでその学説を進めなかったからマルクスが出たのである。……経済学者の系統上では両者の間には多くの学者が居る，即ち所謂正統学派と他方には「リカーヂアン・ソーシアリスト」之れである（福田 [1908] 1925: 1259-1264）。

片山潜や木下尚江，吉野作造，河上肇とともに福田徳三もまた，北の『国体論及び純正社会主義』を評価していたから，北によるリカードウ地代論の理解を福田が意識していたとしても不思議ではない<sup>32)</sup>。しかし，マルクスの搾取論がリカードウ地代論の援用であることを示唆し，リカードウとマルクスの間にはリカードウ派社会主義者を位置づけた点で，福田の経済思想史の見通しははるかに広いものであった<sup>33)</sup>。

ドイツ留学後に教授となった母校の東京高等商業学校（現在の一橋大学）を離れ，1905年から1918年まで慶應義塾大学で教えた福田は，1912年に「価値の原因と尺度とに関するマルサスとリカルドとの論争」を，ついで1913年に「リカルド経済原論の中心問題」を著した。福田は，吉野作造とともに黎明会を組織し「生存権の社会政策」を唱えたことで知られるが，輸入学問に依存する経済学の狭い枠を独力で突き破った日本のリカードウ研究の先駆者でもあった。その「福田好みの原典主義に裏づけられた第一次的リカードウ研究」（真実 1962: 156）には，今日なおかえりみられるべき独創性が見いだされる。リカードウを論じたこの2つの論文で福田は，みずからが理解するリカードウ経済学の基本的な枠組みを明瞭に描きだし，同時代の論争相手で好敵手だった河上肇のリカードウ研究ときわだった対照をみせた。

マルサスとリカルドとが Labour expended か Labour commanded かに付て根本的に見解を異にし，彼等が学問的生涯の全局に涉りて終始論戦を継続しつつありたるは百年の昔の事となれり。均しくアダム・スミスより流れ出でたる潮流は，之が為めに截然二箇に分れて今日にまで及べることは重大事なり。……リカルドは其労働価値説を必ずしも終始一貫して主張せず，原論の第1版と第3版とは文献の上にはさまで著しき変動なきも，内容に

於ては看過す可からざる相違あるを認めざる能はざるのみか、……思想の  
 径路自ら変遷し、著しく後の清算価値説ジョン・スチュアート・ミルの伝  
 へたるに近寄りたるを知り得るなり。……ミルに於ては「費やされたる労  
 働」と「支配せらるる労働」との区別は存せず、労働の外に資本も亦「費  
 やされたるもの」にして、労働即価値論は拡張せられて生産価値論となり、  
 費用学としての経済学は確固に建設せられたるなり。而して是はリカルド  
 が晩年に到達したる思想に基だ近きものなるは認めざるを得ず。……リカ  
 ルドの語を以て之を云へば、経済理論の主題は相対価値にして絶対価値に  
 非る事是なり。元よりリカルドが先づ始めに労働即価値てふ大原則を置き、  
 以下凡て之より演繹して分配行程を論究す可しと為したる論理法は、今日  
 の学者の様に非難する所にして、予も亦之を執らざること勿論なり（福  
 田 [1912] 1925: 1226-1258）。

スミスを源流とする労働価値論がリカードウの投下労働価値論とマルサスの  
 支配労働価値論の 2 つの支流にわかれ、それがふたたび J. S. ミルの生産費説  
 に合流するというのが福田の見立てであろう。こうして福田によって、地代論  
 の系譜からみたりカードウがリカードウ派社会主義者をはさんでマルクスの社  
 会主義の源泉とされる一方、価値論の系譜からみたりカードウはスミスの労働  
 価値論と J. S. ミルの生産費説のあいだに位置づけられた。しかし重要なのは、  
 その価値論の変遷や地代論の系譜をたどることではない。むしろ、福田が価値  
 論を土台とした分配論にリカードウ『原理』の基本構造を見さだめていること  
 である。価値論に基礎づけられた分配論がリカードウ『原理』の理論体系の中  
 核にあることを読みとった福田は、つづく「リカルド経済原論の中心問題」で  
 その認識をさらにはっきりと押し出す。

リカルドが其経済原論に於て中心の問題としたるものは分配の問題にして、  
 彼は之を彼が主張する価値の根本原則の適用と考究したり。而して彼の学  
 説の中最も多く後世に影響を与えたるものは、実に此の分配の行程に於ける  
 価値の運用論なり。……リ [ カルド ] 氏の真意は單純に価値に定義を下  
 して、労働の分量によりて定まるとなすものにあらず、価値の定まるは労  
 銀の多少にかかわるにあらず、現に費さるる労働の分量の多少によると云

ふにあり。換言すれば価値の定まるは分配の行程に関係なく、独り生産の行程に於てすと云うにあり。……氏に取りては価値の定まるは分配の行程と毫も関連することなく、ただ生産の行程とのみ関連するものなり。是れ氏の学説の真意を解するに肝要不可欠点なり」(福田 [1913] 1925: 1249-1252)。

価値が生産(労働)によってのみ規定され、その価値にもとづいて分配の動向が決定されるという理論構造、つまり価値論に基礎づけられた分配論にこそリカードウ理論体系の核心があることを、福田ははっきりとみきわめた。これに対して河上は、価値論と分配論とを分断し、そのそれぞれに福田とは正反対の理解を示した。福田がリカードウ地代論とマルクス搾取論とのつながりを示唆したのに反し、河上はリカードウの地代論をあくまでも「不労所得の一種たる地代の弁護論として最も有力なもの」(河上 [1923] 1982: 187)とみなすとともに、リカードウの地代論ではなく、その価値論とマルクス搾取論との連繫を強調したのである。

リカアドは、労働者が自ら生産せし価値の僅かに一部分をば其の労賃として受けとりつゝあることを以て、経済上の法則に本づく已むを得ざる現象であると為したに反し、マルクスは之を以て階級社会に特有な掠奪関係に本づくものであるとなし、……之に代うる掠奪関係の絶無なるべき共産主義の経済組織を以てするに至るの日あらんことを、望見していたと云う点において、互にその根本の立場を殊にしていたのである。ともあれ、資本主義の経済学は、リカアドに至って略ぼ完成されたものであるが、しかも其の刹那、既に之が胎内において、遠からず社会主義の経済学を生むべき十分なる胎児を孕んでいたと見るべきである(河上 [1923] 1982: 194)。

この一節をさす『資本主義経済学の史的発展』の目次細目には「マルクスの労働価値説に対する準備」とある(河上 [1923] 1982: 10)。本文にこの文言はない。しかし河上は、つづけて「次いで来るものが社会主義の経済学であると云ふことは、実に eine logische und notwendige Entwicklungsreihe (一つの論理的な且つ必然的な発展の径路)なのである」(河上 [1923] 1982: 194)とむすんだ。続編に『社会主義経済学の史的発展』を構想していた河上は、リカードウ価値論の

「発展」としてマルクスの価値論(剰余価値論)を思いえがいていた。

杉原(1980)によれば、1924年度「経済学史」講義ノートの「リカードの価値論」冒頭には「私の見るところによれば、Ricardoの研究のうち資本主義経済学の発達に貢献した部分は有名な地代論を中心とする彼の分配論であって、その価値論は資本主義的経済組織の弁護に役立ったというよりも、むしろ後に起れる社会主義経済学の中心となれる労働価値論の先駆として意義を有する」と書かれているという(杉原1980:362)。リカードウの分配論と価値論とが並列されたまま、まったく関係づけられていないことは、ここにも明らかである。しかも、おそらく分配論と価値論の切断に照応して、河上は、リカードウ体系の根幹にあるのは、価値論ではなく、分配論であると断言した。

租税に関する部分を除けば、それは全部価格論及び分配論から成り立ち、しかもその価格論は分配論に対して従たる地位を占むるに過ぎざることと為っている(アダム・スミスの場合とは丁度反対になっている)のであるから、畢竟彼れの原論なるものは全部分配論であると言っても、甚しき過言ではない(河上[1923]1982:182)。

河上のこの大胆な断定が「リカードウの価値論を十分に論ぜず、とくに価値論と分配論との関連を十分把握するに至っておらず、したがってこうした水準での分配論を中心問題とし価値論を単なる前提もしくは従的な地位を占めるにすぎぬ」(田中1991:21)ものにした、と批判されるのもやむをえない。しかし注目したいのは、河上の「水準」ではなく、リカードウが資本主義経済学の「完成」者であるとともに社会主義経済学の「先駆」者でもあったと位置づけられていることである。だが、河上はリカードウの価値論にマルクスの価値論を直結したわけではない。福田がリカードウとマルクスのあいだにリカードウ派社会主義者をおくのに対して、河上はリカードウとマルクスのあいだにラスキンをおいた<sup>34)</sup>。ロシア革命が勃発する1917年、『大阪朝日新聞』の連載を一書にまとめた『貧乏物語』の序文で、河上は初めてラスキンに言及する<sup>35)</sup>。

ラスキンの有名な句に There is no wealth, but life (富何者ぞ只生活あるのみ)といふことがあるが、富なるものは人生の目的 道を聞くといふ人

生唯一の目的、只その目的を達する為の手段としてのみ意義あるに過ぎない。而して余が人類社会より貧乏を退治せんことを希望するも、只その貧乏なるものが此の如く人の道を聞くの妨げと為るが為のみである（河上 [1917] 1982: 4）。

利己主義と利他主義のあいだでゆれ、人道主義に共鳴した河上は、ラスキンに深い共感をあらわした<sup>36)</sup>。それは、ほとんど求道者の祈りの声に聞こえなくもない。河上は1918年、同僚の石田憲次が訳したラスキンの『此の後至者にも』への「序」で、初めて経済学を大きく3つの潮流に分類した。利己主義を肯定し資本主義を弁護するスミス、マルサス、リカードウ、ベンサム、ジェイムズ・ミルの個人主義経済学と、それを批判し克服をめざす社会主義経済学および人道主義経済学である<sup>37)</sup>。

一方には、組織改造の論を為すものに、社会主義経済学あり。他方には、人心改造の論を為すものに、人道主義の経済学あり。二者相俟って現代社会革新の二大思潮を成す。独逸に於ける第19世紀後半の一大思想家カール・マルクスは、即ち前者を代表するの巨人にして、英国ヴィクトリア王朝時代の三大文星の一と称せらるゝ我がジョン・ラスキンは、即ち後者を代表するの第一人者なり<sup>38)</sup>（河上 [1918b] 1982: 509-510）。

河上は『資本主義経済学の史的発展』の最後を「大胆に帷を揚げよ、光に面せ」（河上 [1923] 1982: 340）というラスキンの言葉でしめくくった。しかし、その人道主義を書評「社会主義は闇に面するか光に面するか」を書いた櫛田民蔵によって批判されたこともあって、河上はその後ラスキンを離れマルクス主義へ傾倒する<sup>39)</sup>。かわって河上のラスキン研究を引き継いだのは、第一高等学校時代にラスキンとてあい京都帝国大学に入って河上のもて学んだ御木本隆三と、東京高等商業学校専攻部（1920年4月から東京商科大学）で福田徳三から「社会思想家としてのカーライル、ラスキンおよびモリス」を研究課題に指示された大熊信行であった<sup>40)</sup>。

#### 4. 小泉信三と堀経夫

リカードウの『経済学および課税の原理』の全訳を世に送りだした小泉信三と堀経夫のリカードウ研究についていうべきことは多い。しかしその全体像を論じる用意は少ない<sup>41)</sup>。ここでは、福田徳三のもとで学んだ小泉と河上肇のもとで学んだ堀の2人が、福田と河上からリカードウ研究を対照的に、しかも交差するように継承したということだけを指摘しておこう。

小泉は、意外なことに、リカードウ『原理』の理論体系の核心を福田のように価値論に基礎づけられた分配論とはみななかった。

リカードウの分配論とその価値論との先後、もしくはその位置の主客は果して如何という問題に達する。……分配論が先にあって、価値論が寧ろ後に来ている。リカードウは分配法則の決定をもって経済学の主要問題となし、しかもその「原論」においては分配論そのものに入るに先だって、先ず詳細なる価値論を巻頭第一章に試みているから、通常彼れの価値論は彼れの分配論の基礎となるものであるかの如く解せられており、またそれに理由もあるが、しかし厳密に考察すれば、リカードウの価値論はその分配論の基礎となすに足らず、却ってその分配論そのものが価値論の前提になっている(小泉 [1927] 1968: 323)

価値論を分配論の前提におく福田のリカードウ解釈とは反対に、分配論が価値論の前提になっているというのが小泉の理解であった。小泉のリカードウ研究の「大きな特徴」は、価値論が分配論の基礎になるのではなく、分配論が価値論の前提になっている、というこの「大胆な断定」にあるといってよい(寺尾 1968: 488)。小泉は、価値論を分配論の基礎においた福田ではなく、むしろ分配論と価値論とを切り離しリカードウ体系を分配論そのものとみた河上の解釈に近いところにいるといえるだろう。

ところが、河上に師事した堀も、河上の理解には従わなかった。むしろ「河上のリカードウの価値論、分配論の取扱いに不満をもち、これをバネにしてリカードウ研究へと積極的に接近し」(田中 1991: 20)、小泉とは対照的に、価値

論に基礎づけられた分配論を主張した。その集大成が1929年に刊行された『リカードウの価値論及び其の批判史』である<sup>42)</sup>。

『原理』を貫いている根本思想は、諸貨物の価値は其の生産に投ぜられた労働の分量によって定まるが、労賃及び利潤はその価値の中から支払われ、また地代はその価値を標準として支払われるのであるから、従ってこれ等の三者は、譬えていえば一定の容積を有する水瓶の中から労働者、資本家、及び地主によってそれぞれ自分のものとして汲み出さされる水の容量の如きものである、故にこれ等三者の中の或る者が汲み出す水の容量は直接に他の二者の汲み出す容量に影響を与える、といった分配上の相互関係を示すことにあつたのである。……リカードウの価値論または価格論が、労賃論、利潤論、及び地代論をもって成る彼れの分配理論に対して如何に密接な関係をもっているかということ、即ち彼れの分配論をして各々孤立した労賃論、利潤論、及び地代論の単なる集合体ならしめないように、如何に価値論が統一作用を行って居るかということ……（堀 [1929] 1949: 6-8）

小泉が分配論を価値論の前提としたのに対し、堀は、リカードウの理論体系では価値論が分配論を基礎づけ分配の動向を決定する、と理解した。堀が、河上ではなく、福田のリカードウ解釈の線上にいることは明らかであろう。その50年にわたるリカードウ研究を回顧した堀は、河上のリカードウ解釈との違いをきわだたせる一方で、福田の自著への評価を強調した<sup>43)</sup>。

河上教授のリカードウの扱いは、彼の分配論を中心課題とし 現に『史的発展』のなかには「彼の原論の中心問題は分配論である」との記述が、目次と本文上欄外とにあります、価値論をそれに付随せしめる、といった格好になっていたのであります。私は、後に、価値論から出発して分配論に及ぶ、という解釈方法を採用しましたし、今でもそうであります。が、河上教授のそれはその逆であつたのであります（堀 1973: 6）。

リカードウの価値と分配の関係にかんする理解という点からみれば、小泉は福田ではなく河上を継承し、堀は河上ではなく福田を継承した、といてよい

だろう。さらに興味深いのは、小泉と堀がともに、リカードウ経済理論の社会主義理論への「貢献」ないし「関連」を指摘していることである。堀は『リカードウの価値論及び其の批判史』を刊行する前年の1928年に『リカード派社会主義』を出版し、リカードウの価値論がリカードウ派社会主義者に与えた影響を論じた。他方、はやくも1917年に「トマス・ホジスキンの労働果実全収権主張」を著した小泉は、1925年の論文「リカードオとロバート・オオウエン」で、リカードウの経済理論が社会主義理論に「貢献」していることを指摘した。

リカードオの経済学説が、他面大いに社会主義理論の発達に貢献しているのは、注目を要する。彼れの価値論は、人為的に数量を増加し得る商品の価値は、その生産に費やされる労働量がこれを決すると教え、利潤論は利潤が賃銀の高下と反対に高下すると説き、またその地代論は地代が不労所得なることを説明した。これ等の説が社会主義的理論の根拠に利用せられたのである。……賃銀以外の所得、即ち利潤及び地代は、労働者によって産出せられた価値の横領、即ち「労働搾取」の結果に外ならぬとの結論に導いたのである。ロバート・オオウエン自身も、その労働貨幣の提案は、リカードオの影響を受けてしたものであった(小泉[1925]1968: 64-65)。

小泉はさらに、ウィリアム・トンブソンやトマス・ホジスキ、ジョン・グレイ、フランシス・ブレイなどの名前をあげ「これ等の人々の労働搾取説が多くリカードオの価値論を根拠にしているところから、或いはこれを称してリカードオ派社会主義者という」(小泉[1925]1968: 66)とつづけている。小泉はすでに、1920年の論文「地代論と社会主義」で「Ricardo-Henry George-Fabianismの脈絡を辿」って、リカードウからマルクスへではなく、リカードウの地代論からヘンリー・ジョージの土地国有化論を経てフェビアン協会へといたる社会主義の系譜をえがいていた(小泉[1920]1968: 360-382)。

こうして、リカードウ派社会主義者をリカードウとマルクスのあいだに位置づけた福田と、リカードウの価値論とマルクスの価値論を接続した河上が、交錯しながらも、地代論と価値論の系譜をたどった小泉と堀にそれぞれ継承された。たしかにリカードウ価値論の位置づけをみるかぎり、マーシャルの流れを



くむ福田と小泉の理解はマルクスに依拠する河上と堀の理解とは異なる。しかし、この二組の師弟の懸隔にみられるように、リカードウ研究の継承関係には、これまで考えられていたよりも、はるかに複雑なからみあいとねじれがあったのである。

## おわりに

日本は、明治維新につづく50年あまりのあいだに急いで近代を駆けぬけようとした。日清、日露、第一次大戦と10年ごとにくりかえされた戦争と、それと軌を一にする急速な工業化と都市化の進展は、貧困や格差の拡大、環境破壊をもたらしたばかりか、あいつぐ不況や恐慌のなかで、アジアに植民地を獲得して膨張主義をおしすすめ、政府批判や社会運動を弾圧する「時代閉塞」の状況をうみだした。日本社会のこの急激な変貌は、国家に主導された西洋資本主義の模倣、少なくともそれへの順応にともなう反作用ないし副作用だったとみることもできる。

リカードウは、日本社会のこの歴史的転換期に遅れて受容され、研究された。戦前日本のリカードウ研究は、それを文献数から判断するかぎり、1920年代にピークを迎える<sup>44)</sup>(図2参照)。研究分野は、地代論が突出して多く、ついで価値論と貨幣論、それに国際経済学と賃金論がつづく<sup>45)</sup>(図3参照)。ここで注目しなければならないのは、第1に、1929年の世界恐慌に先だつ1920年の戦

図2 日本のリカードウ研究文献数の推移(1869 - 1944年)

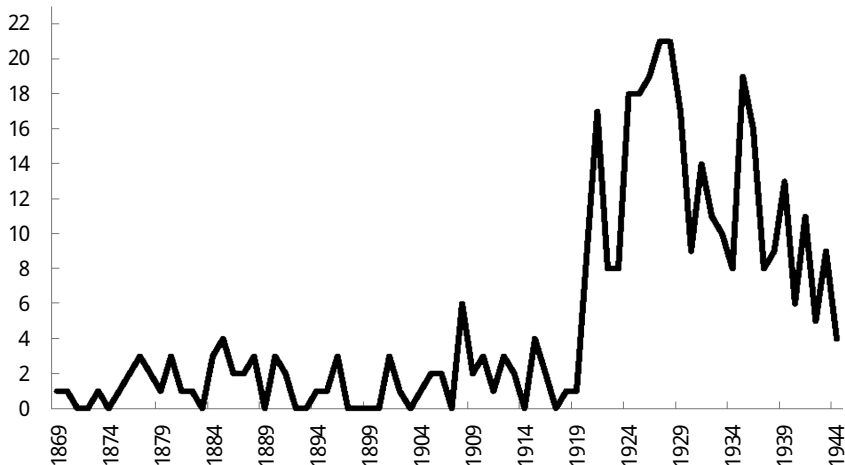
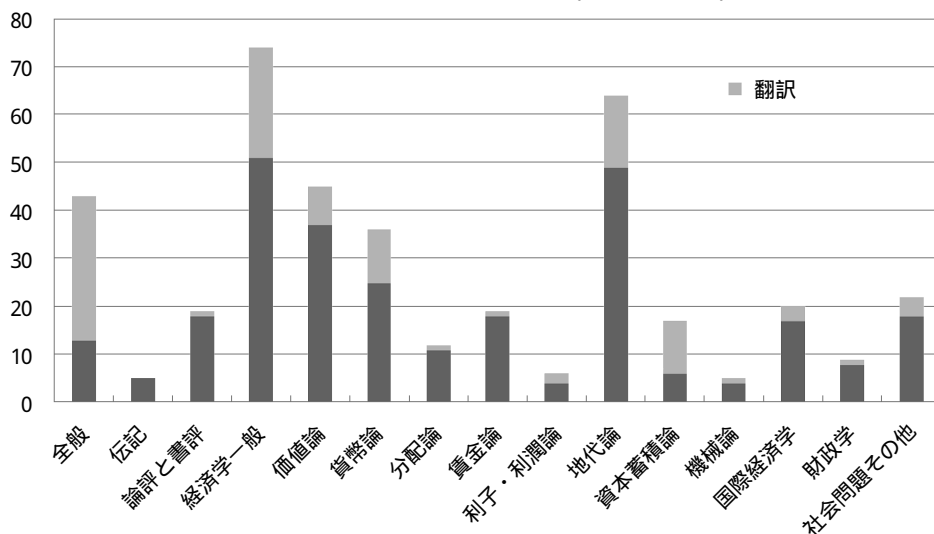


図3 分野別日本のリカードウ研究(1869-1944年)



後不況と1923年の関東大震災、1927年の金融恐慌があいついで日本を襲ったこの時期に、リカードウに関心が向けられはじめたことである。それは、日本社会が直面していた現実の問題を反映したものだだったと考えられる。リカードウの経済理論と社会主義理論との関連が注目された背景には、こうした時代状況があったことを見逃してはならないだろう。第2に、あわせて396にのぼるリカードウ研究文献のうち、4分の1をこえる112が外国語からの翻訳であった。西洋経済書の翻訳が日本のリカードウ研究に果たした役割は、とくにその初期において、きわめて大きかったとみななければならない。

リカードウの受容と研究が遅れた理由のひとつを「狭義の経済理論のみから成るのではなく、社会哲学的考察をも含んだ、政策学・統治学的色彩の濃い、かなり広義の経済学こそが当時の日本で必要とされていた」(早坂1971: 88)からだった、とひとまず言うことはできる。いまなおリカードウ研究が「狭義の経済理論」の枠外をでないともみられることが少なくないのも、それを例証するであろう。

しかし、その後につづく日本のリカードウ研究の素地を準備した福田徳三と河上肇の2人は、輸入学問の「複製」という狭い枠を打ち破り、日本社会の現実に根ざした「社会哲学的考察」、少なくとも「狭義の経済理論」をこえた「広義の経済学」をめざしていたのではなかったか。そうだとすれば、そ

の後の継承と断絶があらためて問いなおされなければならない。そのためには、リカードウの受容と研究を含めた日本の経済思想の歴史を見なおし、西洋資本主義体制へ強制的に組みこまれた日本社会の歩みを再検証しなければならないだろう。この問いはまた、なぜ「西欧経済学が狭義の理論としてではなく、それをも含むが、それよりも広い思想として受け入れられたのなら、その思想が多少とも日本に根を下してもよかったように思われるが、事實はそうならなかった」(早坂 1971: 89)のかという大きな問題につながる。それはおそらく、今日なお日本の経済学が抱える問題であるとともに、経済学の枠をこえた近代日本の問題であろう。

注

- 1) このとき「物理学、経済学、そして特に植物学、外科学および内科学を深く究めようとしていた」蘭学者は『解体新書』の翻訳に加わった桂川甫周と中川淳庵であった(Thunberg 1788-93: 訳 167)。また、出島でツウンベリーと親交を結んだ蘭方医の吉雄耕牛は、のちに河上肇や福田徳三に評価されることとなる、傑出した経済書『佃原』を著した三浦梅園と交流があった。なお、ウブサラ大学でリンネに師事したツウンベリーは、日本からもどると 1781 年に母校の学長に就任し 1784 年に *Flora Japonica* (『日本植物誌』) を刊行する。
- 2) 三橋 ([1928] 1996: 6-7)。
- 3) Morris-Suzuki (1989) 第 1 章、杉原・逆井・藤原・藤井 (1990) 第 1 編、Komuro (1998) などを参照。
- 4) Morris-Suzuki (1989) や杉原 (1990) を参照。
- 5) 加田 (1934, 1937), 堀 (1935, 1948, 1991), 本庄 (1946, 1957), 玉野井 (1971), 杉原 (1972, 1980, 1992, 2001), 三橋 (1976), Sugiyama and Mizuta (1988), Morris-Suzuki (1989), Sugi-hara and Tanaka (1998), 井上 (2006), Nishizawa (2012), Izumo and Sato (2014) などを参照。
- 6) Sugiyama and Mizuta (1988) の Appendix 2 (Western Economics Books Translated into Japanese, 1867-1912) には 116 冊の翻訳書が紹介されている。その国別内訳は、イギリス 44 冊、アメリカ 34 冊、フランス 14 冊、ドイツ 13 冊、イタリア 4 冊、オーストリア 4 冊、オランダ 2 冊、ベルギー 1 冊である (Sugiyama and Mizuta 1988: 293-300)。「邦訳史研究」のみから西洋経済思想受容の実像を正確につかみだすことはできないとしても、「邦訳史」の全体像さえまだ十分に明らかになっていないことは注意されてよい。
- 7) 「一訳書に数国の著者を紹介している場合がある」ため冊数合計と各国別合計とは一致しない(杉原 1980: 108)。なお本庄 (1957) では本庄 (1946) にあった 1871 年のオランダ 1 冊が削除され、オランダの合計数が 3 冊から 2 冊へ変更された。
- 8) ドイツ書が増えるのは 1887 年前後からだが、それにつれて英米の経済書が減っているわけではない。少なくとも「邦訳史」の事實は、1881 年の「明治十四年の政変」を転機とする明治国家の方針転換によって、ドイツの国家主義的な経済学がそれまでの英米仏

の自由主義経済学にすっかりとってかわったとする通説を支持しないようにみえる。西洋思想の受容の実態は、はるかに複雑だったとみるべきであろう(杉原 1990: 3-36)。

- 9) たしかにこのころから「蘭学」が「洋学」へと様変わりし、オランダ語と蘭学の重要性は低下する。しかしオランダは、17世紀から18世紀にかけて、デカルトやスピノザ、ロック、ヴォルテールをはじめとする主要な西欧知識人の政治的避難所であった。西洋の経済思想　そしてまた日本の経済思想　へのオランダの影響は、今日までなお十分に解きあかされているとはいえない。リカードもその人生の一時期をオランダで過ごしている。
- 10) エリスとフォーセットの著書が翻訳されたのはたんなる偶然ではない。「国家の急務」として経済学を学ぶ「初学に益あり」(神田 1867: 1-2)と考え、あるいは「経済の綱領を示し以て初学の徒を便し」(林 1873: 1)と思い、「諸書を繙閲」のうえ「文体頗る簡易に主義また極めて明晰」に「経済学の大義を網羅」(永田 1877: 1-2)した入門書が、意図して選ばれたのである。
- 11) ミリセント・フォーセットのこの啓蒙的な入門書は、日本に初めてロッチデール公正先駆者組合を紹介し協同組合運動誕生の契機となったことで知られるが、「地代論の代表者としてのリカードウという定説……[の]最初の伝達者」の役割をも果たした(真実 1962: 80)。
- 12) じっさい永田健助は、その「緒言」で「意大利にても之を其の国語に訳して専ら学校の間で用」いていると聞いたと述べ、イタリアで教科書に使用されていることを翻訳のときに認識していた(永田 1877: 2)。
- 13) Faccarello and Izumo (2014) は、リカードウ受容の各国(語)比較を試みたものである。日本のリカードウ受容にかんするまとまった研究は、いまのところ、真実(1962, 1965, 1971, 1975)とIzumo and Sato (2014)、竹永(2014)以外にみあたらない。なお、真実(1975)は真実(1971)を再録したものである。
- 14) 本稿は、真実の詳細をきわめた研究に多くを負っているが、その「特異性」の主張とくに「マルクスの影の部分」(真実 1965: 4)としてのリカードウ受容という基準には同意していない。その「特異性」や「普遍性」は、経済思想だけでなく、西洋思想総体の大きな枠組みのなかで再検討しなければならないように思われる。
- 15) J. S. ミルの『経済学原理』は林董と鈴木重孝によって1875年から1886年にかけて翻訳され、スミスの『国富論』は石川瑛作と嵯峨正作によって1882年から1889年にかけて全訳された。マルサスの『人口論』は大島貞益がジョージ・ドライズデールの匿名書からの抄訳を1877年にだしたが、その原著からの最初の抄訳は1910年の三上正毅による『人口論』で、全訳は1923年の谷口吉彦による『マルサス人口論』であった(竹村 1926)。ところがリカードウの『経済学および課税の原理』は、ようやく1921年に堀経夫と和田佐一郎が別々に抄訳し、小泉信三と堀経夫による全訳がそれぞれ刊行されたのは1928年になってからのことである。
- 16) イギリス経済学協会『エコノミック・ジャーナル』の通信員であった添田寿一は、1893年、日本の経済学教育の状況を、J. S. ミル、フォーセット、ジェボンズ、マーシャル、ウォーカー、ロツシャーが日本の大学や高等教育機関で教科書に使用され、ウェイランド、ペリー、スミス、J. S. ミル、フォーセットの著作が、ケアリーやリスト、ジェボンズ、マーシャルとともに訳され、マーシャルのものが徐々に広く用いられるようになってきた、と報告している(Soyeda 1893: 334-335)。ここにもリカードウの名前は登場しな

い。添田はまた、日本の26人の経済学者を自由貿易主義8人、保護主義6人、国家社会主義6人、中立6人に分類し、自由貿易派が多かった日本の大学もいまや国家社会主義へ向かいつつあり、保護主義者と国家社会主義者とが協力して自由貿易主義者に対抗している、と指摘した。日清戦争前夜の思想状況を想起させる。

- 17) 本稿は Izumo and Sato (2014) と一部が重複している。
- 18) 和田はその「訳者序」に「已にアダム・スミスやマルサスが抄訳にしる邦語になって現はれている我読書界に於て殊にマルクス全集の刊行せられつつある今日リカードの全訳は早晩出なければならぬ」(和田 1921: -1) と記したが、自らの手で全訳することはなかった。
- 19) 「全体の8割までは、私が共訳者としての責任を負担し得る」という河上の言葉にまちがいがなければ、訳文は事実上、河上と堀の共訳とあってよい。河上は「凡そ翻訳については、謂わば印象的の訳し方と、写実的の訳し方と、二種の方法があり得ると思われるが、本書は、極めて神経的な写実の方法に據った。それは原著の性質が、或る程度までは日本語としての理解し易きことを犠牲とするも、成るべく原本の字句に忠実ならんことを要求する、と信じたが為めである」(堀 1921: 3) とその序に書いた。だが、加田哲二はこれを「真面目なる翻訳である」としながらも、その方法が「度を過ぎて……普通の読者にとっては難解の文章である」と評した(加田 1921: 165-167)。
- 20) このほか史官本局訳の『理財原論』が1876年に、また川本清一訳の『増補改正理財原論』が1880年に刊行された。
- 21) 育英舎は1870(明治3)年11月4日に開塾し、漢文と英語、筆算を教育したほか「Encyclopaedia の講筈」(百学連環)を月6回開いたという(森 1898: 118-126)。西は、周知のように、哲学をはじめ、科学、芸術、技術など今日だれもが使っている、しかし当時の日本には存在しなかった、さまざまな用語を西洋語から日本語へおきかえ、あらたに創造し、定着させるという途方もない作業にとり組んだ。経済用語も試作している。こうした「翻訳」は、その作業過程じたいが西洋経済思想の受容の一面を明らかにするであろう(たとえば下谷(2014)参照)。
- 22) 西と津田がオランダ語で書き記した5科の講義ノートのうち、経済学だけはついに日本語に翻訳されなかった。
- 23) 西と津田は、1873年、森有礼や福澤諭吉、加藤弘之、中村正直などととも10名で明六社を創設し『明六雑誌』を発刊した。のちに神田孝平も加わる明六社は、雑誌や講演を通じて西洋経済思想の普及と啓蒙につとめた。
- 24) これは、J. R. マカロク編 *The works of David Ricardo: with a notice of the life and writings of the author* から、貨幣と金融に関する4論文を翻刻したものである。その序文には原書が「高価」でしかも「絶版」であること以外に翻刻の理由は述べられていない(Griffin 1901: ii)。1872年にアメリカで生まれたチャールズ・サムナー・グリフィンが東京帝国大学法科大学経済学及財政学教授を勤めたのは、1899年9月から亡くなる1904年9月までで、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)や後任の夏目漱石が同じ大学で英文学を教えていた時期と重なる(東京大学百年史編集委員会 1986: 259)。このとき学生だった河上肇もグリフィンからリカードウについて学んでいる(河上 1983: 285)。なお、グリフィンには私家版の Griffin (1902) がある。
- 25) 犬養の保護主義は『東海経済新報』創刊号の「何謂保護」にその全容がほぼ言い尽くされているとみてよい(犬養 1880: 1-6)。

- 26) 田口の比較生産費説批判を検証した研究に牛島(1992)や大島(1999)がある。田口によるペリー批判とリカードウ批判とは区別されなければならないが、「リカード氏の説を駁す」を書いた田口が、少なくとも主観的には、リカードウの比較生産費説の批判を意図していたことは否定できないであろう。
- 27) 田口卯吉が1879年に創刊した『東京経済雑誌』と犬養毅が1880年に創刊した『東海経済新報』を舞台とする自由と保護をめぐる論争や田口の自由貿易論については、長(1983)、熊谷(1995)、小峰(1995)などを参照。なお、のちにマルクス主義を受容する河上肇は、その初期には農業保護論を展開し自由貿易を批判していた(飯田鼎1989)。
- 28) 「東洋のルソー」と呼ばれた中江兆民は、1891年1月28日付の『立憲自由新聞』で、政府批判の文脈でバステアとともにリカードウの名前をあげている(中江[1891]2001:227-229)。
- 29) 吉田は industrial revolution を「産業革新」と訳したが、第8章では「産業革命」という訳語も用いた。「産業革命」という用語の起源と歴史を検討した神武(2001)を参照。
- 30) すでに福澤諭吉が土地私有と地主制度を批判し「一種の土地社会主義」を唱えていたこと(飯田1989:10)や、リカードウの地代論にもとづくヘンリー・ジョージの土地共有論が明治の日本で知られていたことを考えあわせると(注31参照)、土地所有批判とリカードウ地代論との結合は、必ずしも北の独創とはいえないかもしれない。しかし、少なくともそれは、リカードウ地代論を社会主義に結びつけた、おそらく日本でもっとも早い主張であった。
- 31) 同時代の世界的な反響という点からみれば、マルクスよりもむしろ、十数ヶ国語に訳され人気を博した『進歩と貧困』の著者ヘンリー・ジョージをあげるほうがふさわしい。リカードウの地代論に立脚した土地共有論は、当時すでに日本でも知られていた(山崎義三郎1991:423)。1891年に刊行された城泉太郎の『濟世危言』に日本でのその最初の紹介がある(帆足1969:1)。
- 32) 福田は、その書簡に「一言を以て蔽へとならば「天才の著作」と評するの尤も妥当なる……高著の根本思想と立論結構の博大なるに驚き、運筆の辛辣と旁証巧妙なるに酔ふ、思うに此書マルクスの資本論に及ばずと雖も其他の平凡者流を抜く」としたためた。だが同時に「服し難きもの決して少なしとせず、異日或は公けの論壇に於て卑見を開陳し得んことを自ら望む」と書くことも忘れていない(北1972:580-581)。
- 33) 1897年から1901年にかけてドイツに留学した福田は、主としてミュンヘン大学でルヨ・ブレンターノに師事し、帰国後、母校の東京高等商業学校教授となるが、1905年から1918年まで慶應義塾大学で教え、1919年から再び母校で教授をつとめた。
- 34) 同じ年に書かれた「ラスキンの『此最後の者にも』」には「個人主義経済学の信用打破に就て最も力ありし英国の思想家」として、ラスキンだけでなく、J.S. ミルとトマス・カーライの名前があげられている(河上[1918a]1982:159)。
- 35) 御木本は、のちに「日本の偉大なマルクス派の教師である河上肇は、かつて同僚から「日本のラスキン」と呼ばれたラスキン主義者だった」と回想している(Mikimoto 1931:40)。御木本真珠店を興した御木本幸吉の長男だった御木本は「小さな資本家」を嫌って家業を継がず、ラスキンからマルクスへと向かった河上にかわって、ラスキンの研究と普及に一生を捧げた。
- 36) 河上の「愛読者」だった小泉信三は、『貧乏物語』が出版されるとすぐにこれを読み、ただちに「貧困論 『貧乏物語』を読む」を書いた。小泉は「徹頭徹尾モラリス

- トであり理想主義者」である河上が、かつてカーライルやラスキンが「英国経済学に加えたと同じ批評をわが経済学に加えん」としていると評した（小泉 [1917] 1968: 467-468）。
- 37) 小泉が「河上博士の踏みつつある道」を『中央公論』に寄稿し「河上博士は3つの物の調和統一に苦心しておられるようである。3つと云うのは経済学と社会主義と及び博士に天賦の理想主義とがこれである。如何にしてこの3つを調和するか。これを3つながら調和する方法があるか、或いはその中の1つ、もしくは2つを捨てなければならぬか。これに対する最終的の解答は未だ与えられていない。……博士が人間の道徳的改善のためには貧乏を根絶しなければならぬという立場から出発しながら、その貧乏を根絶する方法如何との問に対しては、道徳的抑制をもってその重なるものとなすという矛盾の観ある結論に到着されたのはこの事を証明している」（小泉 [1919] 1968: 471）と書いたのは1919年3月であった。小泉のこの秀抜な洞察は、河上のゆらぎとせめぎあいの複雑な心情の、同時代の証言とみることができる。
- 38) これは、京都大学『経済論叢』第4巻第4号（1917年）と第6巻第4号（1918年）に掲載された「Unto this Last を読む」を「ラスキンの『此最後の者にも』」に改題し『社会問題管見』に再録したときの前文で、同僚の石田憲次が訳した『此の後至者にも』への序文をそのまま再録したものである（河上 [1918b] 1982: 158, 509-510）。
- 39) 河上は1928年刊行の『経済学大綱』「序説」の冒頭に「大胆に帷を揚げよ、光に面せ」というラスキンの言葉をラスキンの名前をださずにふたたび掲げている（河上 [1928] 1983: 152）。河上の人道主義については、なお検討の余地があるように思われる。
- 40) 大熊 ([1927] 2004: 207)。大熊が1927年に出版した『社会思想家としてのラスキンとモリス』の一部は、大熊が福田のもとで作成した卒業論文を手直しし1921年に東京商科大学『商学研究』第1巻第1号に発表したものである。
- 41) 森耕二郎を含む戦前期と戦時期のリカードウ研究ともあわせて、あらためて論じたい。
- 42) 田中 (1991) は「河上のリカードウ理解を超えて、リカードウの価値論をまずそれじたいとして研究し、その基礎のうえにリカードウの分配論を把握するといった「価値論から出発して分配論に及ぶという解釈方法」を採った堀教授のリカードウ経済学体系の研究史上における画期的意義」（田中 1991: 22）を強調し、その卒業論文では「価値論から分配論への基礎視角は確立され、「価値論に基づく分配論」としてリカードウ体系の体系的把握への第一歩がすでに確実に踏み出されており、これはわが国のリカードウ研究史上、画期的な意義をもつものであった」（田中 1991: 33-34）と主張する。リカードウの「本格的」な研究は小泉と堀にはじまるという通説に照応するが（真実 1962: 65, 中村 2007: 67）、福田と河上によるリカードウ研究の先駆的な意義を見落としてはならないだろう。
- 43) 堀は『リカードウの価値論及び其の批判史』を福田に評価されたことを回顧し「非常に嬉しかったので、それを切り取って今でもスクラップブックの一隅に保存しています」と話している（堀：1973: 13-14）。「保存」したのは、福田が『改造』1929年7月号の「新刊書読余録」で「私は、此書を得て、日本の経済学研究、必ずしも西洋の後塵を拝するものでない有力の左券を得たることを喜ばざるを得ないものである。……著書の態度には、術学的なところが毛頭微塵も見出せない。これは、実に珍しいこと 少なくとも、我が経済学については である」と述べた書評と、同じ号に掲載し後に『厚生経済研究』に収録された論文「余剰の生産、交換、分配：資本主義社会に於ける『共産原則』の展開」で「邦文で書かれた経済学説批判の書（マルクスについてのものまでも含めて）中、私が今日まで寓目した限りに於いて斬然一頭地を抜くもので、「研究」なる基

だ濫用せられた語は、此書に就いては、一の混淆物を交へずこれを適用し得るものと信ずる」とした批評であった(堀:1973:13-14)。しかし堀は「但し所論の内容については、私に異論なきわけではない」(福田[1929]1930:157)というあとに続く文章を引用していない。井上(2006)は「丹念に忠実に而して精密に研究し、考証し、而して思索したるもの少なくとも今日までに殆ど之れなしと言うも過言にあらず」と堀を「高く評価した」福田の1929年5月4日付け堀あての書簡(関西学院大学図書館所蔵)を紹介している(井上2006:338)。しかし、これらの文面を読むかぎり、福田の高い「評価」は、むしろ福田と堀とが共有する「原典主義」の研究スタイルによるところが大きかったのではないだろうか。

- 44) 文献数には、リカードウを対象にしたものだけでなく、リカードウに言及しているものも含んでいる。文献数は総数で396にのぼるが、じっさいにはこれよりもっと多いにちがいない。なお、いくつかの文献は、出版年不明のため除外した。
- 45) Amano(1962)は、リカードウ研究文献を「一般」「伝記」「評論と書評」「経済学一般」「価値」「貨幣」「分配」「賃金」「利子と利潤」「地代」「資本蓄積」「機械」「国際経済」「財政」「社会問題」「その他」の16分野に分類している。しかし、分類の基準はいまいでその適否を判断するのは難しい。ここではAmano(1962)の分類をもとに、その一覧からもれているものをあらたに分類しなおし、文献は本も論文もすべてを1点と数えた。

#### 参考文献

- Amano, Keitaro (1962) *Bibliography of the Classical Economics: vol. 2, part 3, David Ricardo*, Tokyo: Science Council of Japan.
- Griffin, Charles Sumner (ed.) (1901) *Essays on Currency and Finance by David Ricardo*. Tokyo & Osaka: Maruzen Kabushiki Kaisha.
- (1902) *Notes and extracts to accompany lectures on the history of economic theories*, Privately printed.
- Faccarello, Gilbert and Masashi Izumo (eds.) (2014) *The Reception of David Ricardo in Continental Europe and Japan*. London: Routledge.
- Izumo, Masashi and Shigemasa Sato (2014) The reception of Ricardo in Japan. In Faccarello, Gilbert and Masashi Izumo (eds.) *The Reception of David Ricardo in Continental Europe and Japan*. London: Routledge.
- Komuro, Masaki (1998) Trends in economic thought in the Tokugawa period. In Sugihara, Shiro and Toshihiro Tanaka (eds.) *Economic Thought and Modernization in Japan*. Cheltenham, UK: Edward Elgar.
- Mikimoto, Ryuzo (1931) *What is Ruskin in Japan*. Tokyo: Shimeisha.
- Morris-Suzuki, Tessa (1989) *A History of Japanese Economic Thought*. London: Routledge. 藤井隆至訳『日本の経済思想：江戸時代から現代まで』岩波書店, 1991年。
- Nishizawa, Tamotsu (2012) The emergence of the economic science in Japan and the evolution of textbooks 1860s-1930s. In Angello, Massimo M. and Marco E. L. Guidi (eds.) *The Economic Reader: Textbooks, manuals and the dissemination of the economic sciences during the nineteenth and early twentieth centuries*. London: Routledge.
- Soyeda, Juichi (1893) The study of political economy in Japan, *The Economic Journal* (British Economic Association), 3, London: Macmillan.



- Sugihara, Shiro and Toshihiro Tanaka (eds.) (1998) *Economic Thought and Modernization in Japan*. Cheltenham, UK: Edward Elgar.
- Sugiyama, Chūhei and Hiroshi Mizuta (eds.) (1988) *Enlightenment and Beyond: Political Economy Comes to Japan*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- Thunberg, Carl Peter (1788-93) *Resa uti Europa, Africa, Asia, förrättad åren 1770-1779, del1-4*. Upsala: J. Edman . 高橋文訳『江戸参府随日記』平凡社，1994年。
- 阿部虎之助 (1896)『哲経経済学史』経済雑誌社 (Ingram, John Kells (1888) *A History of Political Economy*. Edinburgh: Adam & Charles Black)。
- 天野為之 (1886)『経済原論』富山房。
- 飯田鼎 (1989)「明治末期における経済学研究と保護主義：河上肇の農業保護論と国民国家論を中心に」慶應義塾大学『三田学会雑誌』第82巻第1号。
- 石川瑛作・嵯峨正作 (1884-88)『富国論』経済学講習会 (Smith, Adam (1776) *An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations*. London: W. Strahan and T. Cadell)。
- 犬養毅 (1880)「何謂保護」『東海経済新報』第1号。
- 井上琢智 (2006)『黎明期日本の経済思想』日本評論社。
- 宇佐川秀次郎 (1876)『銀行実験論』紙幣寮 (Crump, Arthur (1866) *A Practical Treatise on Banking, Currency, and the Exchanges*. London : Longmans, Green)。
- 牛島利明 (1992)「田口卯吉の貿易理論と関税政策」慶應義塾大学『三田商学研究』第35巻第5号。
- 大久保健晴 (2010)『近代日本の政治構想とオランダ』東京大学出版会。
- 大熊信行 ([1927] 2004)『社会思想家としてのラスキンとモリス』論創社。
- 大島貞益 (1877)『人口論要略』有吉三七 (Drysdale, George (1875) *The Elements of Social Science: Or, Physical, Sexual and Natural Religion*, 13th ed. London: E. Truelove)。
- 大島真理夫 (1999)「田口卯吉の外国貿易論について」大阪市立大学『経済学雑誌』第100巻第3号。
- 大原九水 (1901)「リカード氏の賃銀及利潤論を評す」『東京経済雑誌』第43巻第1065号。
- 緒方正 (1869)『官版経済原論』巻五，開成学校 (Perry, Arthur Latham (1867) *Elements of Political Economy*, 2nd ed. New York: Scribner)。
- 加田哲二 (1921)「リカード原著 経済原論 堀経夫訳」慶應義塾大学『三田学会雑誌』第15巻第5号。
- (1934)『維新以後の社会経済思想概論』日本評論社。
- (1937)『明治初期社会経済思想史』岩波書店。
- 神武庸四郎 (2001)「『産業革命』の成立：その語源的解釈」『一橋論叢』第125巻6号。
- 河上肇 ([1917] 1982)『『貧乏物語』序』『河上肇全集』第9巻，岩波書店。
- ([1918a] 1982)「石田憲次訳『此の後至者にも』への序』『河上肇全集』第9巻，岩波書店。
- ([1918b] 1982)「ラスキンの『此最後の者にも』』『河上肇全集』第9巻，岩波書店。
- ([1919] 1982)「マルクスの社会主義の理論的体系」『河上肇全集』第10巻，岩波書店。
- 店。
- ([1923] 1982)『資本主義経済学の史的発展』『河上肇全集』第13巻，岩波書店。
- ([1928] 1983)『『経済学大綱』序』『河上肇全集』第15巻，岩波書店。
- (1983)『河上肇全集』第24巻，岩波書店。

- 河津暹(1908)「貨銀に関する学説について」『法学協会雑誌』第26巻第8号。
- 神田孝平(1867)『経済小学』紀伊国屋源兵衛(Ellis, William (1852) *Grundtrekken der Staatshuishoudkunde* translated by H. Hoofit Graafland from *Outlines of Social Economy*, London, 2nd ed., 1850)。
- 北輝次郎(1906)『国体論及び純正社会主義』北輝次郎。  
(1972)『北一輝著作集』第3巻, みすず書房。
- 櫛田民蔵(1924)「社会主義は闇に面するか光に面するか: 河上博士著『資本主義経済学』の史的発展」に関する一感想」『改造』第6巻第7号。
- 熊谷次郎(1995)「三つの経済論争」杉原四郎・岡田和喜編『田口卯吉と東京経済雑誌』日本経済評論社。
- 小泉信三(〔1917〕1968)「貧困論:『貧乏物語』を読む」『小泉信三全集』第1巻, 文藝春秋。  
(〔1919〕1968)「河上博士の踏みつつある道」『小泉信三全集』第1巻, 文藝春秋。  
(〔1920〕1968)「地代論の社会主義的应用」(初出のタイトルは「地代論と社会主義」)『経済学説と社会思想』(國文堂書店)『小泉信三全集』第1巻, 文藝春秋。  
(〔1925〕1968)「リカアドオとロバート・オオウエン」(初出のタイトルは「リカアドオとロバート・オエン」)『近世社会思想史大要』(岩波書店)『小泉信三全集』第8巻, 文藝春秋。  
(〔1927〕1968)「リカアドオ原論解題補遺」『小泉信三全集』第5巻, 文藝春秋。  
(〔1929〕1969)『リカアドオ研究』(鉄塔書院)『小泉信三全集』第6巻, 文藝春秋。
- 小峰和夫(1995)「田口卯吉の描いた開放経済国家日本の進路」杉原四郎・岡田和喜編『田口卯吉と東京経済雑誌』日本経済評論社。
- 阪谷芳郎(1887)『経済学史講義』哲学書院。
- 下谷政弘(2014)『経済学用語考』日本経済評論社。
- 城泉太郎(1891)『済世危言』知新館。
- 杉程次郎(1908)「労銀基金説, 其論拠及沿革を論ず」『日本法政新誌』第12巻第12号・第13巻第1号。
- 杉原四郎編(1972)『近代日本の経済思想: 古典派経済学導入過程を中心として』ミネルヴァ書房。
- 杉原四郎(1972)『西欧経済学と近代日本』未来社。  
(1980)『日本経済思想史論集』未来社。  
(1990)『日本の経済思想家たち』日本経済評論社。  
(1992)『日本の経済学史』関西大学出版会。  
(2001)『日本の経済思想史』関西大学出版会。
- 杉原四郎・逆井孝仁・藤原昭夫・藤井隆至編(1990)『日本の経済思想四百年』日本経済評論社。
- 鈴木券太郎(1882)「経済学四大家評伝」『東京経済雑誌』第5巻第99号。
- 田口卯吉(1878)『自由交易日本経済論』経済雑誌社。
- 竹永進(2014)「大戦間期における日本のリカード研究」大東文化大学『経済論集』第102号。
- 竹村豊太郎(1926)「マルサス人口論各版和訳本の研究」慶應義塾大学『三田学会雑誌』第20巻第12号。
- 田中敏弘(1991)『堀経夫博士とその経済学史研究』玄文社。
- 谷口吉彦(1923)『マルサス人口論』弘文堂書房。

- 玉野井芳郎 (1971) 『日本の経済学』中公新書。
- 長幸男 (1983) 「解題『東海経済新報』刊行事情」復刻版『東海経済新報』第7巻, 日本経済評論社。
- 寺尾琢磨 (1968) 「解説」『小泉信三全集』第5巻, 文藝春秋。
- 東京大学百年史編集委員会 (1986) 『東京大学百年史：資料3』東京大学出版会。
- 中江兆民 ([1891] 2001) 「政府国」(『立憲自由新聞』1月28日) 『中江兆民全集』第12巻, 岩波書店。
- 中村廣治 (2007) 「わが国におけるリカードウ研究」神奈川大学『商経論叢』第43巻第1号。
- 永田健助 (1877) 『宝氏経済学』永田健助 (Fawcett, Millicent Garrett (1876) *Political Economy for Beginners*, 4th ed. London: Macmillan)。
- 西周 ([1870] 1981) 『百学連環』大久保利謙編『西周全集』第4巻, 宗高書房。
- 浜田健次郎・伊勢本一郎 (1894) 『経済学史』八尾新助。
- 早坂忠 (1971) 「日本経済学史の諸断面(1) 経済学との接触」『経済セミナー』第193号, 日本評論社。
- 林正明 (1873) 『経済入門』求知堂 (Fawcett, Millicent Garrett (1872) *Political Economy for Beginners*, 2nd ed. London: Macmillan)。
- 福田徳三 ([1908] 1925) 「リカルドの地代論よりマルクスへ」『経済学全集』第3巻, 同文館。  
([1912] 1925) 「価値の原因と尺度とに関するマルサスとリカルドとの論争」『経済学全集』第3巻, 同文館。  
([1913] 1925) 「リカルド経済原論の中心問題」『経済学全集』第3巻, 同文館。  
([1929] 1930) 『厚生経済研究』(上) 刀江書院。
- 藤本幸太郎 (1908) 「所謂リカードノ劣銀鉄則ニ就テ」『日本法政新誌』第12巻第12号。
- 帆足凶南次 (1969) 「徳富蘇峰とヘンリー・ジョージ」『日本英学史研究会研究報告』第107号。
- 堀経夫 (1928) 『リカアド派社会主義』日本評論社。  
([1929] 1949) 『リカアドウの価値論及びその批判史』評論社。  
(1935) 『明治経済学史：自由主義・保護主義を中心として』弘文堂書房。  
(1938) 『経済原論』河出書房。  
(1948) 『新修明治経済学史』(上) 高島屋出版部。  
(1958) 『理論経済学の成立：リカアドウの価値論と分配論』弘文堂。  
(1972) 「リカードウ研究50年を顧みて」『経済学史学会年報』第10号。  
(1973) 「リカードウ研究50年の回顧」関西学院大学『経済学論究』第26巻第4号。  
(1991) 『増訂版 明治経済思想史』日本経済評論社。
- 本庄栄治郎 (1946) 『日本経済思想史概説』有斐閣。  
(1957) 『日本の経済学』日本評論社。
- 真実一男 (1962) 「明治および大正前期におけるリカアドウ導入史」大阪市立大学『経済学年報』第16集。  
(1965) 「大正後期より戦前までのリカアドウ導入史」大阪市立大学『経済学年報』第22集。  
(1971) 「リカードウ」杉原四郎編『近代日本の経済思想：古典派経済学導入過程を中心として』ミネルヴァ書房。  
(1975) 『リカード経済学入門』新評論。
- 松村光三 (1909) 「賃銀学説」『国民経済雑誌』第7巻第4号。

- 三上正毅 (1910) 『人口論』 日進堂 (Malthus, Thomas Robert (1798) *An essay on the principle of population, as it affects the future improvement of society: with remarks on the speculations of Mr. Godwin, M. Condorcet and other writers.* London: J. Johnson)。
- 三橋猛雄 ([1928] 1986) 「明治経済思想史資料解題」 『雑文集 古本と古本屋』 日本古書通信社。  
(1976) 『明治前期思想史文献』 明治堂書店。
- 森鷗外 (1898) 『西周伝』 西紳六郎。
- 森耕二郎 (1926) 『リカード価値論の研究』 岩波書店。
- 山崎義三郎 (1991) 「訳者解説」 ヘンリー・ジョージ 『進歩と貧困』 日本経済評論社 (George, Henry (1898) *Progress and Poverty: An Inquiry into the Cause of Industrial Depressions and of Increase of Want with Increase of Wealth: The Remedy*, 4th ed., New York: Doubleday and McClure)。
- 吉田巳之助 (1908) 『英国産業革新論』 大日本文明協会 (Toynbee, Arnold (1884) *Lectures on the industrial revolution of the eighteenth century in England.* London: Longmans)。
- 若山儀一 (1877) 『自由交易穴探』 若山儀一 (Byles, John Barnard (1870) *Sophisms of free-trade and popular political economy examined, by a barrister.* 9th ed., Manchester: Simpkin Marshall & Co.)。

資料：リカードの著作の日本語訳文献（年代順）

- 堀経夫訳 (1921) 『経済原論』 岩波書店 (*On the Principles of Political Economy and Taxation*, 3rd ed., chapters 1-7, 19-21, 24, 30-32)。
- 和田佐一郎訳 (1921) 『経済原理』 内田老鶴圃 (*On the Principles of Political Economy and Taxation*, 3rd ed., chapters 1-6, 21, 30)。
- 小泉信三訳 (1928) 『経済学及課税之原理』 岩波文庫 (*On the Principles of Political Economy and Taxation*, 3rd ed.)。
- 堀経夫訳 (1928) 『経済原論：各版全訳』 (上・下) 弘文堂書房 (*On the Principles of Political Economy and Taxation*, variorum edition)。
- 小泉信三訳 (1930) 『経済及租税原論』 岩波書店 (*On the Principles of Political Economy and Taxation*, 3rd ed.)。
- 小畑茂夫訳 (1931) 『リカード才貨幣銀行論集』 同文館 (*The Price of Gold, Three Contributions to the Morning Chronicle; The High Price of Bullion, A Proof of the Depreciation of Bank Notes; Reply to Mr. Bosanquet's Practical Observations on the Report of the Bullion Committee; Proposals for an Economical and Secure Currency; Plan for the Establishment of a National Bank*)。
- 吉田秀雄訳 (1932) 『経済学及び課税の諸原理、穀物の低き価格、農業保護論』 春秋社 (*Economic essays* edited with introductory essay and notes by E. C. K. Gonner)。
- 三田村一郎・井手文雄訳 (1937) 『リカード軍事公債論』 丸善 (Essay on the funding system. In McCulloch, John Ramsay (ed.) *The works of David Ricardo: with a notice of the life and writings of the author*, 2nd ed., London: John Murray, 1852)。
- 大川一司訳 (1938) 『農業保護政策批判：地代論』 岩波文庫 (*On Protection to Agriculture and An Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock*)。
- 中野正訳 (1942-43) 『リカードオのマルサスへの手紙』 (上・下) 岩波文庫 (Bonar, James (ed.), *Letters of David Ricardo to Thomas Robert Malthus, 1810-1823*)。

- 井手文雄訳 (1948) 『公債論』北隆館 (Essay on the funding system. In McCulloch, John Ramsay (ed.) *The works of David Ricardo: with a notice of the life and writings of the author*, 2nd ed., London: John Murray, 1852)。
- 吉田秀雄訳 (1948) 『農業保護政策批判』日本評論社 (*On Protection to Agriculture*)。
- 吉田秀雄訳 (1948) 『経済学及び課税の諸原理』春秋社 (*On the Principles of Political Economy and Taxation*, 3rd ed.)。
- 堀経夫訳 (1948) 『経済原論』(上・下)改造社 (*On the Principles of Political Economy and Taxation*, 3rd ed.)。
- 加藤誠一訳 (1949) 『経済学と課税の諸原理』研進社 (*On the Principles of Political Economy and Taxation*, 3rd ed., chapters 1-6)。
- 中野正訳 (1949) 『リカードオのマカロックへの手紙』岩波文庫 (Hollander, Jacob Harry (ed.), *Letters of David Ricardo to John Ramsay McCulloch, 1816-1823*)。
- 服部一馬訳 (1950) 『リカードウ農業経済論集』春秋社 (*On Protection to Agriculture and An Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock*)。
- 小泉信三訳 (1952) 『経済学及び課税の原理』(改訂版, 上・下)岩波文庫 (*On the Principles of Political Economy and Taxation*, 3rd ed.)。
- 中野正訳 (1955) 『リカードオのトラワアへの手紙』岩波文庫 (Bonar, J. and J. H. Hollander (eds.), *Letters of David Ricardo to Hutches Trower and others*)。
- 竹内謙二訳 (1961) 『リカード, マルサス, ミルから』慶友社 (Ricardo's *Principles*, Malthus's *Population*, and J. S. Mill's *Principles*)。
- 竹内謙二訳 (1962) 『経済学及び課税の原理』(上・下)慶友社 (*On the Principles of Political Economy and Taxation*, 3rd ed.)。
- 羽鳥卓也・吉澤芳樹訳 (1964) 『経済学および課税の原理』河出書房新社 (*On the Principles of Political Economy and Taxation*, 3rd ed.)。
- 羽鳥卓也訳 (1966) 「利潤論」水田洋編 『イギリスの近代思想』河出書房新社 (*An Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock*)。
- 末永茂喜監訳 (1969) 『前期論文集 1809 - 1811 年』(『デイヴィド・リカードウ全集』第 3 巻), 雄松堂書店 (Sraffa, Piero (ed.), *The works and correspondence of David Ricardo; with the collaboration of M. H. Dobb*, 11vols., Cambridge: Cambridge University Press, 1951-1973)。
- 玉野井芳郎監訳 (1970) 『後期論文集 1815 - 1823 年』(『デイヴィド・リカードウ全集』第 4 巻), 雄松堂書店。
- 堀経夫訳 (1970) 『伝記および大陸紀行』(『デイヴィド・リカードウ全集』第 10 巻), 雄松堂書店。
- 中野正監訳 (1970-75) 『書簡集』1810 - 1815 年, 1816 - 1818 年, 1819 - 1821 年 6 月, 1821 年 7 月 - 1823 (『デイヴィド・リカードウ全集』第 6 - 9 巻), 雄松堂書店。
- 鈴木鴻一郎訳 (1971) 『マルサス経済学原理評注』(『デイヴィド・リカードウ全集』第 2 巻), 雄松堂書店。
- 堀経夫訳 (1972) 『経済学および課税の原理』(『デイヴィド・リカードウ全集』第 1 巻), 雄松堂書店。
- 竹内謙二訳 (1973) 『経済学及び課税の原理』東京大学出版会 (*On the Principles of Political Economy and Taxation*, 3rd ed.)。
- 杉本俊朗監訳 (1978) 『議会の演説および証言』(『デイヴィド・リカードウ全集』第 5 巻), 雄

松堂書店。

竹内謙二訳(1981)『経済学及び課税の原理』千倉書房(*On the Principles of Political Economy and Taxation*, 3rd ed.)。

羽鳥卓也・吉澤芳樹(1987)『経済学および課税の原理』(上・下)岩波文庫(*On the Principles of Political Economy and Taxation*, 2nd ed.)。

杉本俊朗監修(1999)『総索引』(『デイヴィッド・リカード全集』第11巻), 雄松堂書店。

小泉信三訳(2005)『経済学及び課税の原理』(岩波文庫復刻版)一穂社。

\* 本研究はJSPS 科研費22243019の助成を受けた。

(いずも・まさし 神奈川大学経済学部教授)